

屯鶴峯周辺を歩く

タウンウォッチャー 早川和佳子(穴虫)

「このあたりが村だったころのくらしに思いをはせながら屯鶴峯から関屋の方面へ歩いてみました。

国道一六五号から県道香芝太子線を西へ行くと屯鶴峯の入口があります。正面の階段を登ると白い凝灰岩が現われてきます。

この岩の間を歩くとポロポロ崩れやすい部分があり、普通の岩登りとまた違った感じがします。「以前は、それぞれの岩に名前がついていた」そうです。「どんな名前がついていたか」想像しながら登ります。岩肌にしごみつぎ、滑らかな斜面を降りる時は、しっかりと岩を踏みしめ、身体中で岩の大きさや大地を感じる事ができます。白い岩が陽に照らされキラキラとまぶしく、木の緑と鮮やかなコントラストを描いています。「この白い砂は、最近までお米を搗く時に使われていた」と教わったことがあります。

ところどころにある植物の小さな群落。ノイバラやススキ、ヤマウルシ…これらに混じって小さなネズが見られます。この辺りでは、ネズをモロシヨと呼んでいたそうです。「夏には、山からモロシヨを採集してきて家でくすくす食べて蚊取り線香の代わりにした」という話を聞いたことがあります。

屯鶴峯から下りて来ると赤松やヤシヤシなど痩せ地にも強い木々の林があります。この近くの山では、満州事変ぐらいまでは、松茸の出るころが多かったそうです。

村々では、松茸の頃になると山の持ち主の許しを得て縄ばりをして、集団で採集権を守ったそうです。ちなみに、畑では「畑保勝会」という組織があって松茸山の管理をしていたそうです。田尻や関屋にも松茸の出るころがあり、シーズンになると大阪などからお客が沢山来て、テントをはって仲居さんと呼ばれ三味線入りの松茸狩りをするなど、たいそうなものだったようです。こんな時には、山で松茸入りの鶏のすき焼きをしたそうです。

二上小学校の通学路周辺でも松茸が出たそうで、畑のガキ大将が「おい、松茸を取ってこい。小さいのはだめだ」などと関屋から来る生徒に言いつて、学校にいい香りの松茸を持ってこさせようなどともあったとか…。いっはい出ている松茸も戦争が始まるとさっぱり出なくなってきたそうです。とつても残念な消えた自然です。

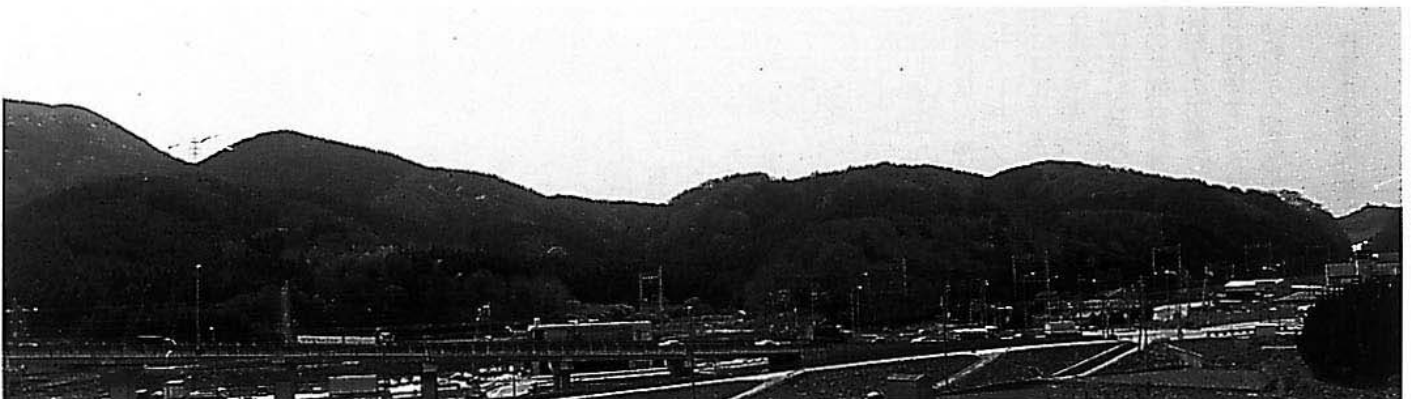
関屋周辺の地味は痩せていて、米や麦の収量は少なかったようですが、さつま芋や大根がたくさん栽培されていた

そうです。さつま芋は、大阪の焼芋屋に関屋芋として人気があったとのこと。村の若い衆は手車に芋をのせ、深夜の一時か二時ごろに家を出て、夜明けごろに大阪の寺田町などに持ってきたとのこと。

田尻には段々畑が多く、今の青葉台あたりは千枚田とよばれていたそうです。農作業は大変な労働で、お年寄りも畦の草刈りなどに精をだして忙しかっただそうです。

また、ここあたりは良質の柴が取れることも有名でした。十一月六日が「山の口あけ」で、この日から山に入り柴刈りをして、藤の花が咲く頃には山行きが終わわり、乾かしておいた柴は三月頃から売りに行ったそうです。農閑期の重要な仕事だったようですが、昭和十年頃に薪が高価でたくさん切ったので、戦後には薪や柴を出せる山は少なくなってきたそうです。

山や千枚田の多くが、今では宅地になつています。残っている林には粗大ごみが目立ちます。自然の恩恵も厳しさも生業のなかで実感していた先人たちが、このごみを見たらどう思うだろうと考えながらも、もやのかかった関屋を後にしました。



穴虫・屯鶴峯を望む